

重要貝類毒化対策事業^{※1}

竹内 照文・小久保友義

宇野 悦央^{※2}

目 的

県下5水域における貝類の毒化状況と毒化原因プランクトンである*Protogonyaulax* 属、*Dinophysis* 属の出現状況について実態を把握する。更に、田辺湾をモデル水域に選定し、*P.catenella* の出現機構とヒオウギのPSPによる毒化機構を究明し、毒化の予知手法を解明する。

なお、詳細は「昭和61年度重要貝類毒化対策事業報告書(毒化モニタリング調査、毒化予知手法開発研究)」に報告されている。

方 法

毒化モニタリング調査は和歌浦湾(アサリ)、芳養湾(ヒオウギ)、田辺湾(アサリ)、串本浅海漁場(ヒオウギ)、森浦湾(ヒオウギ)、でPSP(45回)、DSP(8回)の検査とともに*Protogonyaulax* 属、*Dinophysis* 属の出現状況について調査した。

毒化予知手法開発研究では1.ヒオウギのPSPと*P.catenella*の季節変動について、2.*P.catenella*自然群集の生長について調査した。

結 果

1. 芳養湾ではヒオウギのPSPが5月中旬(Max77.9MU/g—中腸腺)、また、田辺湾ではアサリのPSPが5月上旬(Max11.0MU/g)に規制値を越えていた。しかし、その他の水域では弱い毒化が認められるものの、すべて規制値以下で推移していた。
2. 田辺湾内ノ浦では*P.catenella*が5月上旬に 10^4 cells/ℓを越えてピークを示した。ヒオウギのPSPは3月中旬頃から上昇しはじめ、4月上旬から7月上旬まで約3ヶ月間規制値を越える期間が続いた。
3. *P.catenella*自然群集を透析膜に封入したところG(平均世代時間)=1.49~1.52日という値が得られた。この時、垂下定点の出現数の推移から求められた平均世代時間は0.96日であった。
4. 透析膜に125μmのネットでろ過した海水と生海水を封入したが両者による差はあまり認められなかった。

※1 重要貝類毒化対策事業費による。

※2 水産課